

第1部

第4章

小学校入学期における接続期カリキュラム（「スタートカリキュラム」）について



1 スタートカリキュラムの作成に当たって

スタートカリキュラムとは、小学校に入学した子どもたちが、園等の遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくために作成する1年生入学当初のカリキュラムです。

入学したばかりの1年生が「明日も学校に来たいな」と、意欲がかき立てられるようなカリキュラムを工夫し、学校生活に対する安心感と意欲をもてるようにすることで、幼児期の教育から各教科等の学習への円滑な接続を目指します。

【参考】幼児期の教育との円滑な接続についての記載

小学校学習指導要領 第1章 総則 第2 4 (1) (平成29年3月文部科学省告示)
「(前略)低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるように工夫すること。(後略)」

小学校学習指導要領解説 生活編 第4章 1 指導計画作成上の配慮事項

(平成29年6月文部科学省)

(4) 他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通した総合的な遊びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

【合科的な指導とは】

各教科のねらいをより効果的に実現するための指導方法の一つで、単元又は1コマの時間の中で、複数の教科の目標や内容を組み合わせ、学習活動を展開するものです。

【関連的な指導とは】

教科等別に指導するに当たって、各教科等の指導内容の関連を検討し、指導の時期や指導の方法などについて相互の関連を考慮して指導するものです。

【スタートカリキュラムの意義と作成のポイントについて】

子どもにとっては、遊び中心の生活から教科学習中心の生活へと生活スタイルが変化することは、かなり大きな「段差」です。これまでは、自分のしたい遊びを自分の力で実行する生活が中心でしたが、教科の学習となると、課題をどのように解決するのかが問われるからです。それと同時に、自力での登下校、時間割に基づく生活、施設・設備の違いなども子どもの立場からすれば「段差」です。そのとき、これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でも、これまでやってきたことが通用するのだ」という自信がもてるきっかけとなります。



2 スタートカリキュラムをつくろう

(1) 留意したい五つのポイント

スタートカリキュラムを作成する際には、次の五つのポイントに留意しましょう。

① 幼児期の経験や学びを生かしましょう。

この時期の児童の発達や個人差、それぞれの経験を踏まえたきめ細かい指導が必要です。そのためには、幼稚園・保育園等を参観し、教職員同士の意見交換を行ったり、要録等を活用したりして、児童の学び方や指導の仕方を知り、指導計画作成のヒントにしましょう。

② 生活科を中心とした合科的・関連的な指導をしましょう。

自分との関わりを通して総合的に物事を捉え、直接的・具体的な対象との関わりによって学ぶ児童の発達の特性を踏まえ、生活科を中心とした合科的・関連的な指導をしましょう。そうすることで、ゆったりとした時間の中で、自分の思いや願いの実現に向け、主体的に学び、学ぶことの楽しさを実感できるようになります。

③ 発達を踏まえた時間割や学習活動を工夫しましょう。

この時期の児童は、長時間椅子に座っていることが難しい一方で、学習することに憧れをもっていたり、身体全体で体験を通して学んだりする特性があります。こうした発達の特性を踏まえ、合科的・関連的な指導を行うためには、15分程度のモジュールで時間割を構成したり、活動や体験を多く取り入れたりしましょう。

④ 安心感をもち、生活・学習できる環境を整えましょう。

児童が安心感をもち、自分の力で生活や学習ができるように学習環境を整えましょう。幼稚園・保育園等での環境構成を参考に校内環境を見直し、仲間づくりがすぐに行えるような机の配置、視覚に訴える掲示、集中しやすい教室環境など、児童が安心して、主体的に学びに向かえるように工夫しましょう。

⑤ 職員全員で共通理解を図りましょう。

スタートカリキュラムの必要性を全職員で共通理解しましょう。そうすることによって、多くの支援を得て、きめ細かな対応をすることができます。また、他学年の児童との関わりを生むことにもつながり、小学校生活を安心してスタートさせることができ、その後の6年間の小学校生活を学校体制で、大きく支えることになります。



(2) スタートカリキュラム作成の手順

スタートカリキュラムを以下の手順で作成するとよいでしょう。

【手順】

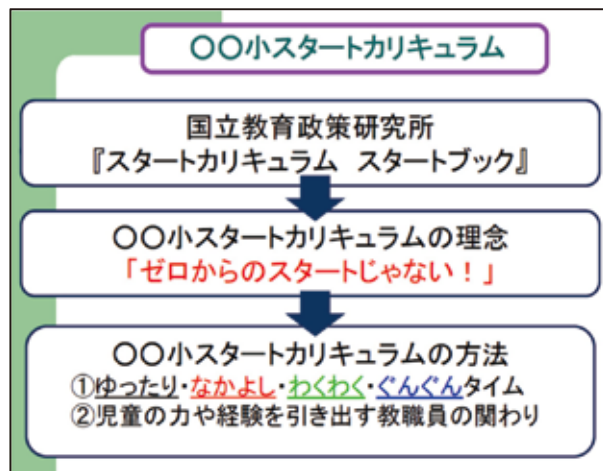
- (1) 幼児期の子どもを理解する
遊びから学ぶ、幼児期の発達の特徴を踏まえる。
- (2) 期待する成長の姿を共有する
安心して主体性、協同性を伸ばす児童の姿を目指す。
- (3) スタートカリキュラムを編成する
 - ① スタートカリキュラムのグランドデザインを描く。
 - ② 児童の思いや願いに即した1日の流れをつくる。
 - ③ 一月分の生活科を中核とした単元配列（合科・関連など）を考える。
 - ④ 週案スタンダードを作る。

＜ここでは、「手順（3）スタートカリキュラムを編成する」について、その具体を述べています。＞

【手順（3）－①】スタートカリキュラムのグランドデザインを描く

「スタートカリキュラムスタートブック」（国立教育政策研究所）を参考に、自校のスタートカリキュラムの理念を共有します。学校教育は決してゼロからのスタートではありません。年長児は、教員が思っている以上にいろいろなことを知っているし、経験しています。幼児教育で身に付けた力を引き出す指導観をもちましょう。

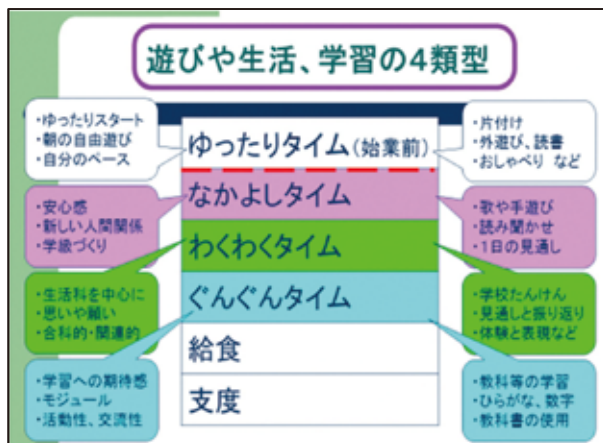
その上で、スタートカリキュラムの方法を考えていきます。1日の流れを園等での過ごし方を参考に、児童の思いや願いを大切に、「ゆったり、なかよし、わくわく、ぐんぐん」の四つの時間で構成していきます。そして、幼児教育で培ってきた力や経験を引き出していく教職員の関わりを大切にしましょう。



【手順（3）－②】児童の思いや願いに即した1日の流れをつくる

始業前の「ゆったりタイム」では、片付けや外遊び、読書、おしゃべりなど自分のペースでゆったりスタートします。安心感を生み出す「なかよしタイム」では、歌や手遊び、読み聞かせなどを行ったり、1日の見通しがもてるようにしたりすることを通して、新しい人間関係をつくり、学級経営の基盤づくりをします。

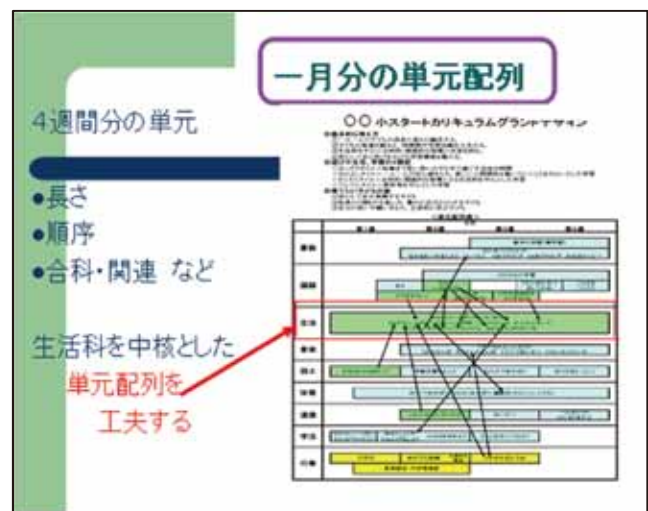
生活科を核として、自分たちのはてなを



解決する「わくわくタイム」では、学校たんけんを中心に合科的・関連的な授業を仕組みます。自分たちで活動の見通しをもち、体験を通して表現（振り返り）することの繰り返しの中で気付きを深めます。そうして学ぶ意欲を高め、「ぐんぐんタイム」（教科の学習）へと誘います。活動を多くしたり、友達と交流する場を設定したりするなど、発達の段階を考慮した授業づくりに心がけましょう。

【手順（3）-③】一月分の生活科を中核とした（合科・関連など）単元配列を考える

入学当初に育てたい児童の姿を明確にし、4週間分の単元配列表を作成します。カリキュラムの中核になるのは生活科です。生活科は、児童の思いや願いを大切にして授業を展開していくところが、幼児期の遊びや活動を通して総合的に学ぶ「学び方」にとってもよく似ています。生活科を中心にして他教科・領域・学校行事などの関連を見通すことで、学校生活の全てを通して、育てたい児童の姿を目指していけるようにします。

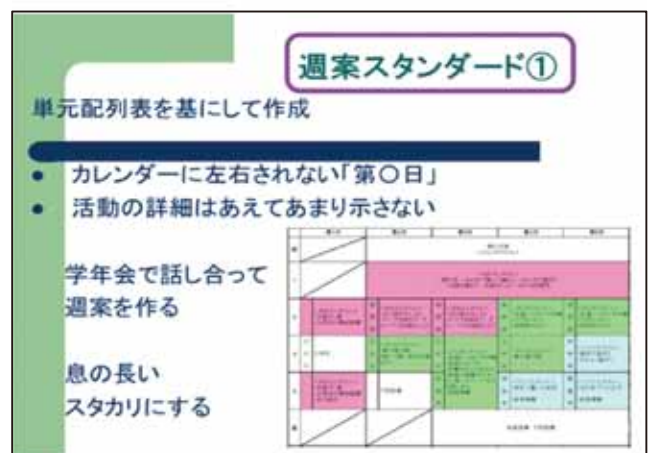


【手順（3）-④】週案スタンダードを作る

単元配列表を基にして、週案のスタンダードを作ります。カレンダーに左右されない「第〇日」として、基本形を示します。活動の詳細はあえてあまり示さないようにして、スタンダードとして毎年改善しながら使えるようにしていきます。その年度の児童の実態に合わせ、学年会で話し合って週案を作るようにしましょう。また、エクセルで作成することで、表計算ができるようになり、5月以降の週案に連動していくようにします。学校の共有できる財産として、息の長いスタートカリキュラムにしていくことが大切です。

週案を1週目から4週目へと横に見ていくと、徐々に「なかよしタイム」が減って、「ぐんぐんタイム」が増えていきます。つまり、遊びから学習へ移行するように仕組みていきます。

そして、1日の流れを縦に見ると、児童の思いや願いに即して遊びから学習へと移行する



ようにつくります。これまでのカリキュラムデザインの考え方にはなかった、まさに児童中心の発想でつくるカリキュラムです。



3 スタートカリキュラム実施のポイントは

スタートカリキュラムの実施に当たっては、次の五点について配慮しましょう。

【実施のポイント】

- (1) 教職員の関わり・言葉かけを変えてみる
- (2) 安心できる環境づくりをする
- (3) 「なかよしタイム」で心をほぐし、仲間をつくる
- (4) 「学校たんけん」の発想を変える
- (5) 児童主体の学びのストーリーをつくる

(1) 教職員の関わり・言葉かけを変えてみる

幼児教育で、児童は、遊びを通して様々な経験をし、様々な力を身に付けています。そうした児童理解を踏まえ、教職員は、教え込むのではなく、児童の力を信じて引き出し、価値付けることが大切です。さらに、児童の思いや願いを引き出し、方向付けをすることで、児童は、安心して自己発揮し、主体性を伸ばすことができます。

※具体的な教職員の言葉かけ例：「幼稚園・保育園等ではどうだった？」

「こんなとき、どうしてた？」

「これから何したい？みんなはどうしたい？」

(2) 安心できる環境づくりをする

一見して見通しがもて、振り返ることができる掲示の工夫や、仲間づくりがすぐにできるような机の配列をしましょう。ユニバーサルデザインの発想を生かして、前面黒板はすっきり整えることで、一人一人が集中力を高めて生活や学習ができるようにしましょう。また、幼稚園・保育園等で行われている環境設定を参考に、安心できる環境づくりを心がけましょう。



(3) 「なかよしタイム」で心をほぐし、仲間をつくる

「なかよしタイム」は、一人一人が安心感をもって、新しい人間関係を築いていくことをねらいとして設定します。幼稚園・保育園等で行ってきた手遊びや読み聞かせなどから1日の生活を始めることで、児童の不安や緊張を少なくすることができます。また、徐々に学習の要素を取り入れていくことで、無理なく教科学習に移行できるように工夫します。



手遊び



身体を動かすゲーム



ペアでじゃんけん



グループでゲーム

(4) 「学校たんけん」の発想を変える

この時期の児童は、学校のことに興味津々です。その新鮮な思いを活動の原動力にしていきましょう。朝の「ゆったりタイム」で「学校のふしぎ」を見付け、「わくわくタイム」で1年生だけの「たんけん」に繰り出すことで、主体性を発揮することができます。その上で、まだ解決できない疑問を2年生と関わる中で解決するといった活動を仕組むことで、自分たちの課題を自分たちで解決していく学び方を身に付けることができます。



まずは1年生だけで



2年生が1年生に聞いて教えたいことを決める





2年生に自分たちの疑問を聞く



解決した課題を振り返る

(5) 児童主体の学びのストーリーをつくる

「学校たんけん」の学習を中核にして、国語、図画工作、体育、音楽など他教科へと「学びのストーリー」をつくることで、児童主体の授業になります。つまり、児童の探究の先に自然に各教科の学習が続くように、一日の教科の配列を考えることで、児童主体の学習をつくり出すことができるということです。まさに、遊びの中から総合的に学ぶ幼児期の学び方を参考にして学習計画を立てることのよさが表れてきます。



おもしろいものを
いっぱい見つけた



絵にかきたい!



文字でつたえたい!



言葉でつたえたい!



みんなに知らせたい!



線を見つけたよ!



見つけたボールと
線でころがしドッジをしよう!



ふしぎなおとがするもの
いっぱい!



この歌を歌いたいな!

資料「やってみると、こんないいこと！」

1年生にとっては

- 安心から自信と意欲へ
- ・「はっけん」と「はてな」の連続
- ・学びに向かう意欲の高まり



上級生にとっては

- 「1年生すごい！できるようになったね！」
- 「もっとなかよくしたいな！」
- ・給食待ち時間に読み聞かせ
- ・がっこうたんけんサポート→いきものランドへ招待



担任にとっては

- ・朝からゆとりあるスタート
- ・一人一人を見てじっくりとかかわる余裕
- ・毎日ほぼ同じ流れ→担任にとっても見通し&安心



保護者にとっては

- ・学校体制で取り組んでもらえることを知り、不安が解消
- ・我が子の様子を見て、安心



◎スタートカリキュラムによって

1年生は、安心して生活することで、自分の力を発揮し、自信や意欲をもって学びに向かうことができます。保護者は、その姿を見て、学校生活への不安が解消され、安心して学校に送り出すことができます。

上級生は、1年生と関わることを通して、みんなが仲良くすることの大切さを学び、上級生としての自覚と責任をもつことにつながります。

1年生の担任は、「幼児教育で培われた力を引き出すことが大切だ」と、これまでの指導観が変わります。そして、一人一人をじっくり見て、見通しをもって支援することができます。

